

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K04	氏名	加藤 信秀
研究主題 —副主題—	個に応じた課題設定とトリオ学習が運動有能感にあたる効果 —小学校における跳び箱運動の学習を通して—		
所属校	国分寺市立第八小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>中央教育審議会答申（2008）では、体育科における児童生徒の学習の課題として、「運動する子供とそうでない子供の二極化」、「子供の体力の低下傾向が依然深刻」、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例もみられること」等が挙げられている。また、小学校学習指導要領解説体育編（2008）では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」が目標の一つに挙げられている。この目標を達成するためには、子供たちが運動技能や知識を習得するとともに、運動への内発的動機付けを高めることが必要である。杉原（1995）や岡澤（1996）は、内発的動機付けは運動に対する自信である「運動有能感」の高まりによって強められると指摘している。</p> <p>また、中央教育審議会諮問（2014）では、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが強調され、アクティブ・ラーニング等の指導法の改善が指摘されている。先行研究から、協同学習は競争的な学習や個人学習よりも高い成果を挙げていることが分かり、本研究において、主体的・協働的に学ぶ学習として協同学習を用いる。</p> <p>これらのことから、児童を生涯にわたって運動に親しませるために、運動有能感を高める協同学習の在り方を検証していく必要があると考える。</p> <p>これまでの実践から、運動量、学びの質の深まりを考え、協同学習のグループ人数は三人で行う学習（以下トリオ学習とする）が効果的であると考え。また、児童の運動への欲求を持続させるために、個々の欲求に応じた課題を設定していくことが必要であると考え。</p> <p>そこで、個に応じた課題設定と協同学習の理念に基づいたトリオ学習を行い、児童の運動有能感にどのような影響を与え、また、それによって、運動愛好度及び体育愛好度、運動意欲度にどのような影響を与えるかを、検証授業を通して検討することが、本研究の目的である。</p>
II 研究の方法	<p>1 基礎研究 研究テーマについて、先行研究・先行実践及び文献から整理・分析を行った。</p> <p>2 検証授業及び効果測定</p> <p>(1) 研究対象と調査期間 調査対象は、都内公立小学校第4学年61名である。検証授業及び効果測定を、平成27年9月から10月までに行った。</p> <p>(2) 検証授業 筆者が、児童に対して体育の授業『4年〇組！跳びっこカーニバル』～器械運動『跳び箱運動』を通して～を各学級6時間行った。</p> <p>(3) 測定方法 ①運動有能感測定尺度（岡澤ら・1996）、運動愛好度及び体育愛好度、運動意欲度を測定する質問紙調査を検証授業前後に実施した。 ②児童による授業に関する形成的評価の質問紙調査を、毎時間授業終了後に実施した。</p> <p>(4) 統計処理 調査を行った項目の処理は、「SPSS Statistics 22」の計算プログラムを用いて行った。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 基礎研究</p> <p>運動有能感は、自己の運動能力、運動技術に対する肯定的認知を意味している「身体的有能さの認知」、自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかを意味している「統制感」、運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知を意味している「受容感」の三因子で構成されている。</p> <p>本研究における協同学習を、「グループのメンバー一人一人の成長を学級全員が願い、そして、学び合い、高め合い、認め合い、励まし合う学習活動」と定義した。</p> <p>パフォーマンスの向上や動機付けの高まりには、明確な目標をもつことと、行った運動に対する直接的なフィードバックが必要であることが分かった。</p> <p>2 検証授業及び効果測定</p> <p>検証授業前後における運動有能感の平均得点の比較を行った結果、運動有能感及びそれを構成する「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の得点が、検証授業後に統計的に有意に上昇したことから、個に応じた課題設定と協同学習の理念に基づいたトリオ学習が、児童の運動有能感を高めるのに有効な手だての一つであることが示された。また、筆者がデザインした検証授業が、児童による授業に関する形成的評価から「主体的な学習」と「友達からのフィードバック」のある授業であることが示され、そして、これらが運動有能感を高める要因となっていること、特に、「主体的な学習」が大きく影響を及ぼしていることが示された。</p> <p>「主体的な学習」を生み出した要因として、三点挙げられる。</p> <p>一点目は、到達レベルを設定した評価指標であるルーブリックを用いたことである。ルーブリックがあることで、児童一人一人が自己の能力に合った明確な課題をもって取り組み、達成感を味わうことにつながっていった。</p> <p>二点目は、三人組でのトリオ学習である。トリオ学習を行うことで、試技ごとにトリオ学習のメンバーから直接的なフィードバックが確実に生まれ、技能や「受容感」の高まりにつながっていった。</p> <p>三点目は、単元の終末に「集団演技」を設定し、児童にトリオ学習の成果を発表するという大きな目的をもたせたことである。学級で一つのものを作り上げるという大きな目的をもたせたことで、トリオ学習では、主体的・協同的な学習が生まれた。</p> <p>運動愛好度及び体育愛好度、運動意欲度について、検証授業後は、検証授業前に比べ肯定的な回答を示している児童が多くなった。また、運動有能感と運動愛好度及び体育愛好度、運動意欲度との間に、相関が見られたことから、個に応じた課題設定と協同学習の理念に基づいたトリオ学習が、児童の運動有能感を高め、それが要因の一つとなって運動愛好度及び体育愛好度、運動意欲度の高まりに影響を与えたと考えられる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>児童が主体的となって学習に取り組めるよう、個に応じた課題設定の手だてを講じたり、児童が取り組んだことに対する適切なフィードバックを保障する環境を整えたりすることは重要であることが明らかとなった。そして、個に応じた課題設定の手だてとしてルーブリックを用いること、また、フィードバックを保障する環境としてトリオ学習を行うことは、児童の運動有能感を高めるのに効果的であると考えられる。</p> <p>しかし、このことが、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」につながっているかどうかは、検討が十分とは言えない。また、他の領域や単元においてどのような効果があるか検討を行っていない。そのため、今後も追跡研究や実践研究を積み上げながら、検討していく必要がある。</p>

